

月日: 2023年 7月 31日 (月)	時間: 10:00~12:00	場所: 福岡市科学館 6階 サイエンスホール+zoom
----------------------	-----------------	-----------------------------

出席者: 以下敬称略、氏名の左に[web]が付いている方はzoomMTGでのリモート参加者

<外部評価委員>

- 麻生 茂 久留米工業大学 副学長・学術情報センター長・工学博士・特別教授 (九州大学名誉教授)
- [web] ■ 有田 寛之 独立行政法人 国立科学博物館 科学系博物館イノベーションセンター センター長
- 高宮 由美子 香椎副都心公共施設なみきスクエア 事業プロデューサー
- [web] ■ 山岡 均 自然科学研究機構 国立天文台 天文情報センター長・広報室長・博士(理学)・准教授

<事業者>

- [web] ■ 佐藤 宏 株式会社福岡サイエンス&クリエイティブ 代表取締役
- [web] ■ 森岡 武 株式会社福岡サイエンス&クリエイティブ 取締役
- 佐藤 正文 株式会社福岡サイエンス&クリエイティブ 取締役
- [web] ■ 藤掛 曜平 株式会社福岡サイエンス&クリエイティブ 取締役

- 矢原 徹一 福岡市科学館 館長
- [web] ■ 高安 礼士 福岡市科学館 PJアドバイザー
- 吉武 秀平 福岡市科学館 事業総括責任者
- 上田 恭子 福岡市科学館 事業推進責任者
- 高山 裕明 福岡市科学館 事業推進スーパーバイザー
- 野上 理恵 福岡市科学館 管理運営責任者
- 丹野 佳代子 福岡市科学館 ドームシアター リーダー
- 穴澤 恵衣美 福岡市科学館 ドームシアター

<オブザーバー>

- 鐘ヶ江 慶 福岡市こども未来局こども政策部こども健全育成課 こども施設係長
- 興梠 達也 福岡市こども未来局こども政策部こども健全育成課 こども施設係

※この外部評価委員会は、事業者が設置したものである。

配付資料: 福岡市科学館年報-2022年度版-
年報サマリ

■議事内容(概要)

発言者

1. 委員長の選出

要綱第3条にもとづき、委員長を互選の結果、満場一致により麻生氏が選出された。

2. 2022年度事業報告

事業者から、年報および参考資料に基づき前年度の事業内容等について報告。

3. 委員意見交換・評価等

事業報告を受け、各委員から意見や評価、提言等が出された。

この1年、大変精力的にいろんなことをされたとわかった。キッズクルー事業の中で、小学生の立場で作ったという展示マップについて詳しく聞きたい。

麻生委員長

キッズクルー活動事業については、昨年度は財団法人乃村文化財団からの助成も受けて実施した。小学4年生の3人のこどもたちが参加しているが、2017年の開館当初から通ってくれている子もいる。科学館のスタッフをする活動に関心をもち応募があった。
2021年度よりクリエイティブアワードのこども審査員としての活動やサイエンスショーの演説補助などの活動を経て、こども向けの基本展示室パンフレットづくりに移行した。

野上

当館には来館者全般向けのパンフレットはあるが、こども向けのものがないということで、キッズクルーのこどもたちが九州国立博物館などの他館見学や、基本展示室内のおすすめ展示物の検討などの活動を重ね、A4サイズを8分割したミニサイズのパンフレットに仕上げた。
完成後は館内に配架していたが、幼保団体が来館時に園児一人ずつのマイ地図として持って来てくださるなどの反応があった。大人から見るととても小さいが、未就学のお子さんたちが手に持っているとうれしい大きさとされており、こども同士ならではの感覚に気づかされた。

上田

<p>現在のキッズクルー1期生については、2023年度も継続しており、サイエンスショーのメイン演示者を担うなどの活動にも挑戦したほか、今秋からは2期生を募集し、1期生は先輩として教え合い新しいメンバーと共に活動していく予定。</p>	高山
<p>今度は高齢者へのパンフレットもあるとよいのではないかと。高齢者の方に制作していただくといいかもしれない。面白い良い活動だと思う。</p>	麻生委員長
<p>様々な活動をされているというのがよくわかる年報だった。前身の福岡市立少年科学文化会館だった時代は本当に子ども向けがメインだったのが、今は中高生や高齢者と介護世代などいろんな層に向けた活動をしていることがよく伝わってきた。あとファミリー層もやはりターゲットになっているかと思う。</p>	麻生委員長
<p>どこの科学館でも、青年層がなかなか足を向けてくれない目を向けてくれない傾向があるが、それに対するアプローチとしてはどのようなものがあるか。サマリー上ではドームシアターイベントのコンサートなどは青年層の参加が見込めるかと思うが、他に何か青年向けで考えているものがあれば教えていただきたい。</p>	麻生委員長
<p>ダーウィンコースやSDGs家族会議は、実は多くの大学生のメンターに支えられており、アルバイトの形で事業の実施を支援していただいている。活動を通じてサイエンスコミュニケーションを勉強してもらうなど、「人が育つ科学館」として、事業に協力してくれる学生も増やしていきたい。</p>	高山
<p>中高生はなかなか参加や来館が多くないが、前述の学生メンターを大学生から中高生まで広げていったり、ダーウィンコース/ニュートンコースの卒業生が運営に関わっていくことなどの小中高大連携も目指している。いろんな世代がどんどん繋がっていき、また社会人になってからも科学館に協力してくれるような流れも期待している。</p>	
<p>SSH(スーパーサイエンスハイスクール)の高校が、当館と連携してサイエンス活動を実施する計画をしていたが、昨年度は大雪による臨時休校と重なってしまい、残念ながら中止となった。2023年度も改めて実施を計画している。</p>	高安
<p>九州大学との連携でグローバルヤングアカデミーのワークショップを開催し、近隣の学校から中高生の参加を促したり、小学生向けのダーウィンコース/ニュートンコースを卒業した子どもたちが引き続きダーウィンゼミという館長主導の講座で研究活動方法を学べる機会なども継続的に設けている。</p>	野上
<p>ドームシアターのイベントでは、対象を大人中心に限定し、未就学児は入場NGというものもある。また、毎年好評いただいているイベントに「熟睡プラネタリウム」というものがあり、元々は勤労感謝の日にプラネタリウムでゆっくり過ごして日頃の疲れを癒していただくという趣旨で全国的に開催されているもの。当館の場合は「大人のための」とタイトルに大人推奨であることを冠して実施し、アンケートの感想などでも大変好評である。</p>	丹野
<p>また、短期的なイベントでは、マニアの方向けや声優さんのファンがとて多く来ていただいて、当館の存在もご存知なかった方が2回3回と通われて年間パスポートを購入されるといったこともあった。こどもの頃に来ていた方が親になったときにまた来てくださるといったことも想定しながら、短期的なものではなく長い目線で、今後も大人の方向けや多様な世代向けのイベントを実施していきたい。</p>	
<p>当館プラネタリウムでは開館当初より仕事帰りの大人向けの夜間投映なども実施してきた。想定よりも夜の利用者は少ない傾向があり、投映スケジュールなどは調整しながら続けている。</p>	野上
<p>特にバレンタインデーや七夕といった季節行事の際は、かなりお客様の層が普段と異なる。大人のお出かけの目的地のひとつになっている。なかなかやはり子ども向けに限定した科学館では見られない光景に毎年驚くほどである。</p>	丹野
<p>様々な活動を試みられていて大変心強い。また今後も様々にまた我々からこんなことやってみたらみたいなのを柔軟に受け入れていただければありがたい。</p>	山岡委員
<p>出前授業やアウトリーチ活動といった館外活動について、特記事項や今困っていることがあれば教えていただきたい。</p>	
<p>出前授業とアウトリーチについては、福岡市からの要求水準上も回数の規定があるが、全体的にアウトリーチの希望が多く抽選となっている。逆に出前授業の中で授業外時間での活動については、放課後に児童も教員も校内に残らないようになっているなど近年の学校の状況変化に伴い、申し込みが無い現状があり、バランスのとり方が課題となっている。</p>	高山
<p>全国的な傾向として、コロナ禍の状況で学校団体の来館が困難となり、施設側に学校へぜひ来てほしいという要望が増えた傾向がここ数年あった。それに対して、スタッフが十分に日を設定して対応しきれなかったという反省がある。</p>	佐藤(正)

1日学習で福岡市立小学校の4年生がほぼ全員各館に来てプラネタリウムを見ているという点は国際会議の開催誘致プレゼンテーションの際にも大きなアピールポイントとなった。
私自身も学習投映番組を見たが、来校する小学校に合わせて校庭から撮影した景色を取り入れたり、授業の進度に合わせて解説を変更する工夫などがある。プラネタリウムだけでなく実験教室でも、本当に楽しいコースを提供できていて、福岡市の小学生、ほぼ全員がこれを体験できることはすごいことだと私自身感じており、プレゼンでも海外のプラネタリウム関係者からも関心が高く、頂きながら聞いてくださっていた。

矢原館長

昨年度はまだコロナ禍の影響大きく、1日学習への来館が困難となったり、当館から学校へ出かけていくのもなかなか難しいという状況があったが、今後は状況も回復しつつあるので、当館の大きな特色として、もっともっと工夫を重ねていけるといいと思っている。

1日学習プログラムとても充実していると思う。ご苦労もあると思うが、ぜひ今後も続けていただければ。

山岡委員

1日学習については、開館当初は全ての市立小学校に貸切バスの手配が難しいという話もあったが、現在はほぼ全校が来館しているということは来館手段の予算措置も福岡市の方でしっかりできているということと理解する。ぜひ今後も引き続き対応していただきたい。

麻生委員

各校の貸切バスの手当については当館を管轄する福岡市こども未来局ではなく、福岡市教育委員会が対応してくださっている。加えて、今年3月に延伸した福岡市地下鉄七隈線を活用しての来館も増えている。

野上

また、途中船を使って来館する学校の乗船時間の制限に合わせてプログラム構成を調整したり、生徒数が少ない学校が多学年や二校合同で来館する場合などにも、柔軟な対応をおこなっている。

年間を通じて安定した数でお客さんが入っているところが非常に気になった。
国立科学博物館は混雑期と閑散期の人数の差が3倍4倍にもなり、夏は混むが冬は空いているといった状況になるが、福岡市科学館は冬もたくさん入っている。
そういう利用傾向は開館時期からあったのか、もしくは開催時期など何か考慮されているのか、傾向があれば教えてほしい。

有田委員

通常はやはり夏の7月後半から8月がピークで、本来であれば8月に10万人とか10何万人の来館が見込まれるが、2022年度は、コロナの8波の影響で夏はそこまで増えず、4月から9月は若干例年より少なく、逆に10月ぐらいからコロナが落ち着いてきて、同時に特別展ティラノサウルス展が始まり、ここで盛り上がりがあった。通常であれば8月がピークで次に冬休み、春休みが、次のピークというわかりやすい山ができる。

吉武

1月から3月にかけても多くの来館があっているが、例えば大人の方が多など冬場の利用傾向はあるか？

有田委員

オープンして数年は年に2回しか特別展をやっておらず、やはり特別展をやらないと利用者数がガクンと落ちるという経験があり、現在はなるべく春夏秋冬4回特別展を開催し、普段年間パスポートで通ってくれる方以外にも来館を促そうとしている。
昨年度は少し長いスパンで、秋から1月ぐらいまでティラノサウルス展があり、特別展目当ての来場者に多く来ていただいたことがある。特別展の傾向としては、やはり長期休みがあるときは、小さいお子さん向け特に夏休みは未就学児、それから小学校低学年にの方がたくさん通ってくれるようなものをメインに開催しているが、秋口については、やや大人向けというか、普段館に来ないような層にご利用いただけるような企画を持ってくるように心がけており、季節ごとにそういう波というか、ターゲットを変えながら実施をしている面がある。

吉武

国立科学博物館でも、コロナを経験した結果、過去の満員電車並みに特別展が混雑していた状況の特異性について改めて気づいた。来館者の混雑をどうやって平準化するのかということも、コロナ以降の課題として博物館科学館は持っている。
季節や時期でターゲットを工夫して、年間通して安定した来場があるというのは、他の博物館科学館のモデルになり得ると思うので、ぜひこの傾向を続けて、他より先進的な取り組みとするとよいと思う。

有田委員

また、年報のアンケート分析では満足度が96%と非常に高い。過去3年度を比較した場合、大変満足と満足合わせて80%と、十分高いが、昨年度はさらに高く、大変満足が70%を超えている。何かのこの変化に対して考察があれば、ぜひ教えていただきたい。

満足度に対してこういった活動をしたことで改善されたというよりも、満足度の高いイベントのアンケートの回答率が高いということが考えられる。イベントに感動された方がその感動を伝えるため、またはとてもつらいこと嫌なことがあった方がそれを伝えるためにアンケートに回答してくださるという傾向が若干ある。

野上

福岡市の要求水準や事業者の提案書にも、インタラクティブな展示であること、利用者が体を動かして関わってインタラクティブに楽しみ学ぶということが強調されており、実際に随所で工夫を凝らしているところが、現在の高い満足度に繋がっていると考えている。
地元企業が出展している連携スクエアでも、嘉徳無線HDが提供しているすべり台など大変人気があり、あらゆるところでそういう工夫がされている。
今後の展示リニューアルやサイエンスナビなどについてもインタラクティブな工夫をもっともっと充実させていくことが重要だと考えている。

矢原館長

<p>昨年度10月1日に5周年を迎え、記念イベントとして国立科学博物館やJT生命誌研究館の館長との対談イベントや中村桂子先生とのワークショップを開催した。</p> <p>こどもたちから非常に積極的に質問が投げかけられ、両先生も真摯に答えていただいた。そういった雰囲気がアンケート結果にも反映されたものと思う。コロナの時期でもありまだ参加者定員は140名くらいずつと絞ってはいたが、好評であった。またワークショップでは事前に書籍を配布した上で小学生から大人までの多世代が共通の理解を持って参加することでより理解度が深まり、新しい提案を官民で考えるという一体感のある時間にできたことも勉強になった。</p>	<p>上田</p>
<p>インタラクティブな展示方針や周年イベントでの取り組みがきちんと満足度に反映されているということだと思う。ぜひその成果を今年度以降にもうまく繋げられれば、また高い満足度を得られるのではないかと。引き続き期待している。</p>	<p>有田委員</p>
<p>館ができる前から関わってきているので、今回報告を聞きながら、最初の5年間そして次の5年間にに向けて絶え間なく継続して実施してきたことが実になってきているのを感じている。素晴らしいと思う。</p>	<p>高宮委員</p>
<p>課題として挙げた中高生の参加について、私もこどもの活動に長年関わってきて、中高生の時期というのはご存知のように多感で、成長が著しいときでもあり、進路や進学などこれからの人生にとっても大きな影響を与える時期である。そういう時期にこそ、中高生に、科学館との楽しい出会いというか、いい出会いが、保障されるといい。</p>	
<p>先ほど、1日学習で福岡市内の4年生がほぼ全員プラネタリウムを体験できるというのは、本当にあの素晴らしいことだと思うので、それと同じように、ぜひ中高生全員が見れるようなことが実現できればいいなと感じた。願わくば、小学校4年生で体験して、3年後が中学生でその3年後が高校生で、とこども時代から青年期にかけて3年に1回、科学館での体験というのが次の活動とかの参加に繋がっていくのではないかと。</p>	
<p>今後の課題としては中高生のこどもたち向けにも、参加できるようなプログラムを積極的に検討していくとか、保障していけるようなことができればより良い。</p>	
<p>ご助言いただいた中高生の来館について一例を挙げると、近隣の私立中学校の3年生が毎年学年全員で来館いただき、館長の講演と利用マナー説明を聞くという連携企画が3年ほど続いている。特に昨年と今年については、「5人の自分を探そう」という心理学やパーソナリティ論に通じるテーマでの講演を、先方のリクエストもあり2年連続で実施した。近隣の学校と連携を深められている好例としてご紹介したい。</p>	<p>野上</p>
<p>講演内容については学校からの依頼で複数案を出したうえで、生徒の希望が最も多かったテーマであり、ちょうど自分とは何か、思い悩む時期であり、人と比べて悪いところを探しがちだが、心理学的にかなり頑健な結果が得られている5つの性格因子を紹介し、それぞれに光と影があるという話をしている。</p>	<p>矢原館長</p>
<p>あらゆる性格因子に光と影があるから、悪いとこばかり見ずに自分のいいところを見て自己肯定をすることが大事だというメッセージであり、既にコンテンツはできている。例えばもっと小さな規模で大きな規模でも、私でなくてもコンテンツを学べば他の者でもできるレクチャーとして、比較的簡便に収集できる5大性格因子の判定アンケートも活用し、性格判定みたいなイベントをしてその中で人間の性格や心理について理解を広めてもらうというような企画は、中学高校生向けにありうるかもしれないと今の話を聞いて思った。</p>	
<p>とてもいい取り組みと思う。こういうところで今これから、来館してほしいと思ってる中学生とか高校生にも、ここに来ることはすごくプラスになるというようにわかってくれるといいなと思う。</p>	<p>麻生委員長</p>
<p>ここに来ると科学の物理の点数が上がるとかではなく、基本的な科学の考え方や、人間そのものをしっかり考えるような力が身につく場所であると伝わるような、そういうアピールの仕方もぜひ今後各案としてやっていけるといい。</p>	
<p>前任の外部評価委員だった九州産業大学の緒方泉先生も博物館浴の研究をされており、ウェルビーイングや博物館法の改正でインクルーシブや包摂性などが話題になっているが、中高生が悩んだり勉強に疲れたりしてるのを癒すようなプログラムがあってもいいのではないかと。例えば勤労感謝の日に、大人の人が熟睡できるプラネタリウムがあるなら試験勉強の終わったときに、中高生が熟睡できる日があってもいい。中高生向けの科学館ならではの学びができるかコミュニケーションなどもありつつ、一方で、とにかく来たら癒されるよっていうのを、それこそ受験勉強してる小学生が対象でもいいと思うが、体験を提供できると、学校単位ではない個人での選択肢になれるのではないかと。勉強とは少し離れても、科学館は使えるというきっかけから次の学びに入るようなアプローチがあってもいいのではないかと考えた。</p>	<p>有田委員</p>
<p>小中高生を対象とした癒しプログラム、とても面白いなと思った。ぜひ取り入れられるなら取り入れたいとチームで話したところ。ウェルビーイングという観点では、今年去年ではないが、コロナでしばらく休館した後に開館した頃、女性の年配の方や何人かの来館者から「開けてくださってありがとうございます」とお声がけいただいた。「コロナで本当に家にいて、行くところもなくふさぎ込んでいたところに、この科学館でプラネタリウム見るの私すごく楽しみにしてて、開けてくださってありがとうございます」と。</p>	<p>丹野</p>

我々は最新の科学や宇宙のことを伝えるといったところに、つい一生懸命になってしまうが、何かやはり(知識だけでなく)別に提供できるものも、このプラネタリウムや科学館という空間の中にはあるということを改めて感じた。先ほどの満足度の件にも通じるかもしれないが、コロナ禍のなか段階的に開館再開した時には、横と前後を1列ずつ空けて、隣も2席ずつ空ける対策を取り、本来の全220席の中で使える席が35席という状態から始めた。そのときも、アンケートや直接のご意見として、「対策をきちんととってくださってるので、安心してることができます」というお声もいただいて、それを段階的に緩和しつつ今はもう220席満席でマスクもなしでということ運営できている。そのように丁寧に丁寧に来館者の皆さんたちの心情というかコロナに対する恐怖感とか、そこに合わせて対応してきたことも、科学館としては良かったのではないかと考えている。今後も皆さんに寄り添う形でやっていきたい。

(丹野)

博物館浴に関しては昨年度から私も大変興味を持っており、実は9月28日に博物館浴の実験プログラムを行うことになっている。ドームシアターでプラネタリウムを見学したこともたちにアンケートや数値測定などを調べてその効果を実施実験するもの。この研究を通して緒方先生とも連携して研究をさせていただき、博物館科学館のあり方を検討していきたいと考えている。

上田

博物館科学館体験という意味でいうと、有田先生に最初のご意見でいただいていた来場者数の平準化にも繋がるが、コロナが落ち着きつつあるここ最近では、特別展の最終日付近など、開館当初のように入場待ちの方の列が外まで長く伸びるといった状況や、基本展示室の中が混雑して体験したい展示が十分に体験できないというような状況も再び見られるようになってきた。

野上

現場スタッフとしてはどのくらいの来場者数が本来の当館の機能を提供できるベストなのかと悩む面もある。

たくさん来るほどいいというものでもなく、多いことでお待たせする時間が伸びたり、提供できるサービスの質が下がり、満足度も下がる、トラブルの元になりうることを考えると、適正な人数が平準化して来てくださって、いい経験をしていただける状況にしないといけないというのは開館からずっと感じているところ。経営的には多くの方に来てくださるに越したことはないが、来館者にとっての体験、ウェルビーイングという意味では、多ければいいというものではない。

また、来館者が多くなることで列整理等の副次的業務に人手が割かれ、本来の演習や展示室等のフロア対応業務が不十分になってしまうという影響もある。元々当館は朝9時半から夜21時半までと長時間開館しており、人員を分散させざるを得ないところもあり、スタッフのウェルビーイングという意味では、しっかりとコントロールしていかないと長く続けられない。

せいかくやりがいのある仕事であっても、体を壊してしまったり、長く続けられるというロールモデルが見当たらず、退職してしまうという例も、この6年間の中にはあった。

一方やや明るい話題としては、最近以前勤務していた方がアルバイトや外部スタッフといった常勤スタッフとは異なる形で支えてくださるといった新しい形も見えてきてはいる。科学館博物館職員の働き方という点では、これからもっと工夫をしていけるところがあるとも思っている。

来館者の満足度が高いということは一つの指標なので、やはりそれをずっとキープするためにはどうしたらいいかを考えねばならない。(来館者が来てよかったと満足できる人数は)だいたい1日あたり何名、などはある程度目標を定めておくのが大事なのではないか。

麻生委員長

HPなどで今何人くらい、や、混雑度何%といった発信があると、行ったことがある方はそれを見ながら判断できるので、全体的な予測を含めてうまく誘導して平滑化できるとよい。情報発信をリアルタイムで発信できるようにするというのはいいのではないかと。来館者も職員もお互いに満足できるようなそういうところを探っていただきながらやっていくと、持続可能な科学館が運営できるのではないかとと思う。

サイエンスコミュニケーション開発会議として、第2期の5カ年の中で考え、ウェルビーイングなどのことについても議論しているところ。

高安

この年報がちゃんと出ている館というのは結構少ない。政令指定都市科学館できちんと事業を俯瞰してデータとしてまとめ、発表しているというのは、指定管理という制度に則しているという点もあるが、全国的にも少ない。

館の運営について、しかるべき基本的なことをやっているということがまず大事であると思う。

全体を俯瞰してみると、標準的な科学館が実施すべき基本的な事業と、ダーウィンコースやSDGs家族会議といった非常にとがったプログラムの二つがそびえ立っている。

一つにはやはり九州大学との共同研究という枠組みがあり、その中には非常に幅広い専門分野の先生方が非常に手間暇をかけてプログラムを作っている。

また、館内で標準的に実施しているプログラムについても、スタッフ同士がそれぞれのプログラムを非常にお互いによくチェックし、丁寧に作っている。

ややもすると科学館などのプログラムというのは担当の学芸員や教育担当者が1人だけで作成することが多いものだが、福岡市科学館の場合には、必ず上司など複数でチェックし、それからその現場を見たりして質の維持をきちんとしていることを感じる。

この外部評価委員会でもSC開発会議でも、中長期的な計画を外部の人も交えて議論しているというのはなかなか難しくできないことだと思う。新しい課題を付加されることについても積極的に対応し、福岡市科学館が今後とも質を維持するために、非常にいい制度ができているのではないかと。

ダーウィンコースとニュートンコースのジュニアサイエンティストを育てる取組みや、SDGs家族会議のファミリーで議論していく場は珍しく、きっかけを館で作ることで家に帰っても継続できる取組みは非常にユニークで面白いと思うし、まさに福岡市の科学館がやるべき一つの姿を表していると思う。

麻生委員長

高く評価していただいて、とてもありがたい。私として今後の課題とと思っていることを、この機会に申し上げたい。
やはり中学生・高校生の利用が少ないというのは着任時にも強調された点であり、そこを意識してダーウィンコース、ニュートンコースをやってきて小中高大連携という方向がかなり見えてきた。
一方で、グローバルヤングアカデミーで高校生向けにワークショップを実施したが、その後に大学生となった参加者の一人からワークショップでの「科学の繋がりを理解する」という経験が自分の進路選択の参考、動機の一つになったという話を聞いてとても嬉しく思った。

矢原館長

中学校・高校の勉強はそれぞれの教科ごとに新しい知識を学んで育っていくが、その繋がりは分かりにくい。実際にはあらゆる科学が繋がっており、自然科学としての社会学も繋がっている。
そういう繋がりを理解することで、大学での学びに繋げていくといった取り組みは、一つ科学館の役割として必要だと思っている。具体的にどうするかは難しいが。

グローバルヤングアカデミーのような取り組みを今後うまく繋げて科学館でやるべきこととして、正解がないような問題について科学館に来る小学生・中学生・高校生が一緒になって考え、ワークショップなどの経験を通じて育っていくということが一つのあり方と思っている。

人間が育っていくプロセスあるいは知識を蓄えていくプロセスというのは、実はそれほど論理的ではなく、かなり身体的なものと言われている。エピソード記憶、あるいは言葉にならないような記憶が、実はその人の知識の体系を形作っていて、その蓄えがあってこそ初めて何か新しい知識吸収ができる。
そういう部分は学校教育でなかなか育てにくいので、科学館としては様々な体験やエピソードなど、言葉にできないようなものも含めた経験みたいなものに裏打ちされた知識の蓄え、引き出しみたいなものがいっぱいあるということが感じられる機会を作り手助けすることが大事だと思う。

ニュートンコースで、こどもたちに大人の理解を求めるのではなく、こどもたちなりに分かったという気持ちになってほしくて、思い切って「表現」の方向に舵を切った。経験したことを友達に説明するときに、どんな表現の仕方でもいいから次、こんなことが問題なんだよと説明できるようにすることを目標にして取り組んだ結果、かなりうまくいったと思っている。

中学生にせよ高校生にせよ、なるほどわかったと思うプロセスは、必ずしも教科書で教えてもらったことで試験でいい点が取れたとかそういうことだけではなく、自分が持っているいろんな経験とうまく結びついて、そういうことかと思に落ちる感覚がとても大事なので、そういうものをうまく作ってあげる手助けをすることが、小中高大をうまく繋げていくための一つの考え方や目標ではないかと思っている。
そういう方向で皆さんのお知恵を借りながら、また新しいプログラムを作っていきたい。

とても共感する。科学と芸術文化の間をこどもたちがどんどん積極的に رفتり来たりしながら体験できるといいないつも思っている。
今のお話のように表現活動の中に、音楽だったり、ダンスだったり、いろんな表現方法が入るといいと思うので、そうしたところに私も何らか、協力できるところがあればと思っている。

高宮委員

今日の議論は、私自身の仕事にも参考になった。皆さんの発言を通じて非常に強く感じたのは、科学館を利用する方になってほしいのって第一に考えているということ、本当におもてなしの心で運営をされているというのがとても強く伝わった。

有田委員

様々なターゲットに対して様々なアプローチを考えて実践されているというところに大変感銘を受けた。最初の5年間から次の5年間に移るところで、新たな目標などが先ほどのお話の中にもあり、国内の他施設との連携なども挙げられていたが、館の大変優れた活動ぶりを他施設が吸収して役立ててもらえることを期待している。また館がやってこなかったことが他施設で取り組まれているようであれば、それも取り入れていただければと考えている。

山岡委員

多様な主体、小さなこどもたちから高齢者まで、そうした人たちが活躍できたり、楽しめる科学館っていうのが何か見えてきたのではないかと感じている。
それと同時に、たくさん素晴らしい実績実践があるが、なかなかその全体像が、わかりやすく伝えられてないという課題も感じる。特に届けたい人たちに届けていくためには、どういう伝え方がいいとか、そうした検討工夫がもっとできるといいのではないかと。

高宮委員

4. 委員長総評

今日ご参加の先生方から、それぞれの視点で非常に貴重な評価をいただいたこと、それをぜひ今後の活動に生かしていただきたい。

麻生委員長

2022年度で411万人を達成されたということ。しかもそれが参加者が満足度が高いということは非常に大事なことで、本当に頭が下がる思いである。

自主企画として昨年度は特別展「ヒコーキ展」を実施したが、こういう自主企画が、科学館の力が試されるところで、それを今後もずっとやり遂げることでスタッフの方も成長と自信が得られ、スタッフのまとまりも出てくると思うので、これはぜひ今後も進めていただきたい。

ドームシアターでの大人向けイベントの取り組みなど、初めて知ることもあったので、ぜひそういったのはしっかりアピールしていただきたい。年報でもしっかり書いてはいるが、強調したい取り組みなどをさらに工夫して書くと、いい内容がもっとアピールできると思う。

学習支援活動に関しては、SDGsの家族会議は大変ユニークな試みであり、矢原館長が始めたダーウィンコースやニュートンコースも本当にこれからのこどもたちを育てる大きな原動力になってくる。またその卒業生が中学生・高校生になり人材として活躍しながらいい活動ができていくことに期待ができる。

昨年度は高齢者のウェルビーイングをテーマに取り上げているが、今後は、それぞれの学年とか年代に応じてのウェルビーイングも目指して行ってほしい。子どもたちは受験戦争で大変だと言うが、プロになるための勉強をしているんだという気持ちを持ち続けることが大事だと思う。受験で単に100点を取るのがいいことではなく、概念形成をすることによって、自分がプロになるところに一步一步近づいているってことを実感できるような気持ちがあれば、つらい作業ではなく楽しい作業になるはずなので、矢原館長の講演テーマのような、ああいう気持ちの整理の仕方と一緒に伝えていけると、とても良い科学館になると期待している。

交流事業やネットワーク形成も多く取り組んでいるが、元々科学館を作る当初に、まずは東南アジアで一番の館を目指すという目標設定があったと記憶している。福岡市が東南アジアの窓口であることもあり、コロナが終わってきたので、そういう方向にうまく育ってきていると思う。

来館者数の平準化の問題については、ある程度の固定数を増やすことが重要と考える。福岡市科学館の魅力を知ってもらうために、修学旅行を勧誘していくと良い。例として呉市の大和ミュージアムは中高生の修学旅行団体の来館数が多い。平和活動としての展示に加えて科学の大切さや技術についても伝えていっている施設なので、参考にしつつ、福岡市科学館では科学の本当の面白さということ伝えていけると良いのではないかと感じる。修学旅行団体を取り込むことによって、1週間の来館者の増減を平滑化できたり、館の新たな魅力を発見できるのではないだろうか。

また名誉館長の若田光一宇宙飛行士にもご協力を仰ぎながら連携していけると、ご本人も喜んでいただけるのではないかと思います。

最後に、近年は科学の進歩がさらに早まり、特にChatGPTに代表されるAIに関して活発に議論されている。新型コロナウイルスの正しい情報の発信についても積極的であった館なので、今後はAIに関する正しい考え方についてもぜひ議論していただきながら、科学館としての姿勢を示すことが、福岡市民に対して大事なことであると思う。

5. 事業者、福岡市コメント

本日の報告は、昨年度の年報に準じてご報告させていただいた。比較的目立つ部分の報告が中心になったが、実際に取り組んでいるメニューや事業は更にたくさんある。それらは年報上では、単に実施回数の数値や、1-2行の記載に限られているかもしれないが、これらも含めて、スタッフ全員で力を合わせて取り組んでいる。今後は、ぜひともそこも、よく見ていただいて、ご評価をいただきたい。

佐藤(正)

こういった外部の委員の方々からの忌憚のないご意見をいただく場に参加し、科学館が利用者の目線に立ち、様々な声を反映させながら、一丸となって取り組んでいることが再認識できた。

福岡市

先ほど佐藤氏からも話があったとおり、この会議では年報の中からいろいろトピックを取り上げていたが、いつも通常でやっているテーブルサイエンスなど、そういった毎日やるようなイベントなども、大変な労力がかかっているということを認識している。その大変な中、職員初めボランティアの方も、いろいろ頑張って運営しているということを改めて認識できた。また今年から新たな5年間の中期計画に基づいて、通常のイベントに加えて様々な新たな取り組みをしていかないといけないため、大変な部分はあると思う。今日の委員の皆さまからの評価やアドバイスを参考にしながら、事業を進めていきたい。

福岡市